

ヴィクトル・ユゴーの共和政認識—エドゥアール・セガン研究の一視点

川口 幸宏

果たしてセガンとユゴーとの接点はあるのか

エドゥアール・セガンは1812年フランスに生まれ1880年にアメリカで没した。1830年代に彼が取りかかった白痴児教育は、「教育不能」と言われ続けてきた人たちに「教育によって人間は発達する、社会化可能である」ことを、具体的に指し示すものであった。セガンの業績はアメリカ・ヨーロッパで広く知られ、また継承されているが、フランス時代については近年ようやく着目されはじめたところである。

この、いわば、「空白時代」を埋めるための作業は、史資料的に残されているところが少なく、セガン研究は資史料発掘作業と重ね合わせて行わなければならない作業である。史資料と言ってもセガンの足跡そのものを示す直接史料と、セガンの足跡を意味づけるための間接資料とがある。本稿は、後者について考察を試みた小論という性格を持つ。

セガンはヴィクトル・ユゴーの文学グループと交わりがあったという指摘がある。果たしてその真意はどうであるのか？論理的結節点があるかどうかを明らかにするために、熱烈な山岳派共和主義者であったと思われるエドゥアール・セガンに対して、ユゴーはどうであったのかを、探してみたい。

1.

エドゥアール・セガンはヴィクトル・ユゴーより10年遅れてこの世に生を受けた。セガンの父親は医学博士、ユゴーの父親は優れた武人。出自と育ちはまるで異なるが、近代フランスを模索する激動の時代を共有していたことは事実である。この共有が二人の実際的な相互交流によってなされたということが、他の誰よりもセガンを理解していたといわれるL. P. ブロケット博士によって読まれたセガンの葬儀の際の弔辞の中に示されている（清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』全4巻、日本図書センター、2004年。第4巻資料編所収。伊藤麻子・川口幸宏共訳）。

ブロケットは次のように言う。

「彼（＝セガン）は、革命（＝1830年革命）以来パリで文学活動を行っていた非常に

聡明な若者たちのグループに加わった。彼らの中には、ルドリュ・ロラン、ピエール・ルルウ、ルイ・ブラン、ミシェル・シェヴァリエ、兄のフルーラン、ジャン・レノー、そして少々年配だがメンバーとして喜んで迎え入れられたヴィクトル・ユゴーがいた。全員がそれぞれ、後年、名声を博したこの同胞集団の中で、エドワード・セガンは最年少であり、慎ましく振る舞っていたが、聡明さにかけては引けを取らなかった。皆、サン＝シモンとその後継者であるアンファンタンとオランド・ロドリグ両父親(注：サン＝シモン主義者たちはサン＝シモン教で結びあった「家族」として集団生活を営んだ。その集団の最高位が二人の「父親」である)の哲学と政治経済学の教えを受け継いでおり、『最大多数に最大幸福を』に基づいた、共和政に速やかに移行することを堅く信じていた。」

ブロケットの弔辞はセガンのフランス時代の思想・哲学・運動などを説明する時の前提条件として、これまでのセガン研究史で扱われてきている。すなわち、セガンは、サン＝シモニストであった、急進的ないしは進歩的共和主義者であった、文学創作で糊口を得ていた、そしてヴィクトル・ユゴーと実際的な交流があった、等々。ブロケットが言うところの「パリで文学活動を行っていた非常に聡明な若者たちのグループ」とは具体的に何を指すのか。ブロケットの主意はサン＝シモン主義者集団(「家族」)のことを指していると読み取ることが可能だが、それがユゴーにも妥当するのか。その手がかりを求めるべく幾編かのヴィクトル・ユゴー伝を読んできたが、残念ながら行き当たることができなかった。確かにユゴーは、たとえば『レ・ミゼラブル』の社会・経済基調に「産業社会」論を読み取ることが可能だが、それをサン＝シモン主義者と親密な交流の中で形成したとは、説明しきれない。

ユゴーは1827年、自宅(現在、パリ4区マレ地区のユゴー博物館である)にロマン派のサロンを開いている。ロマン派の拠点となり、またユゴー自身もロマン派(とりわけ社会ロマン派)の巨頭となるのだが、そのきっかけとなるのはサント＝ブーヴ(Sainte-Beuve)という若い批評家との出会いである。サント＝ブーヴは社会派批評家。『グローブ』紙(ピエール・ルルウ主宰)にユゴーの詩集『オードとバラッド集』(1826年刊)の批評を書いたことによって、ユゴーとの間に親密な友好関係が誕生し、またユゴーはサント＝ブーヴの社会派の目線の影響を受けた。『グローブ』紙は自由主義的であったが1831年にはサン＝シモン派の機関紙を喧伝するにいたる。文学のロマン派は1830年前後にはサン＝シモン主義やフリーエ主義の影響を受け社会ロマン派という一つの勢力を生み出す。サント＝ブー

ヴはサン＝シモン「家族」の「参会者」の一員であった。

2.

私はこの世紀の申し子だ。一つの過ちが、年ごとに、
我が精神から出ていく、驚いたことに私自身の精神から。

ヴィクトル・ユゴーは 1802 年生まれ。「この世紀」、すなわち 19 世紀初頭に生まれた。ナポレオンが終身第一統領となった年である。フランスのヨーロッパでの覇権を目指す大きな歴史転換期を迎えていた。フランス社会はナポレオンが 1804 年に皇帝となり第一帝政の時代に入る。ユゴーの父親は後にナポレオン軍の将軍となる優れた武人であった。ユゴーの母親はヴォルテール流の自由主義思想を持っていた。ユゴーの両親は子どもを 3 人もうけているが決して仲むつまじい夫婦であったわけではない。武人として各地を転々と赴任する夫に不満を持つ妻は子どもたちを連れてパリに行く。その先で愛人をつくる。この愛人は元ナポレオン軍の将校であったがナポレオンの勘気に触れ軍列を離れ、はずみでナポレオン打倒の陰謀に加わり、追っ手のかかる身となっていた。彼はユゴーすなわちヴィクトルの名付け親であったし、こよなくヴィクトル兄弟を愛し、ヴィクトルらに大きな影響を与えていた。ヴィクトル・ユゴーは、当時、実の父よりも母の愛人を「父親」と認めていたともいわれる。ナポレオン帝政が倒れ復古王政の時代になった時(1814 年 1815 年)にユゴーが復古王政を歓迎したバック・グランドとなる一つの逸話である。

これが「母親」との「一体感」を示した行動を端的に表したものであるとするならば、その一方で生みの父親への「一体感」の表現も強く見られる。1827 年の作品『ヴァンドーム広場のコロヌ(円柱記念碑)に捧げるオード(Ode à la colonne Vendôme).』はナポレオン I 世を讃えた政治詩であるが、明らかにナポレオン軍の将校として勇を馳せた父親に対する憧憬を表したものである。つまり、ヨーロッパの覇者としてのフランスのために戦う父親に対する敬愛の表れであり、それがたまたまナポレオン第一帝政の数々の手柄を讃える形で形象化されたと見ることができる。それはなによりも、ユゴーの強い愛国心として終生引き継がれる。もっとも、ユゴー自身は武器を持って戦うことを否定した平和主義者であった点が憧憬する父親と異なるところである。武器の代わりに言論を以てフランス文明を中心としたヨーロッパ統合を訴え続ける。『ヴァンドーム広場のコロヌに捧げるオード』は彼のそうした愛国心が最初に強く表現されたものだと見ることができる。ヴァンドームの

コロヌに対するユゴーの賛辞は終生消えることがなかった。「復讐のモニュメント、きらめくコロヌ、至高のブロンズ」とユゴーは称えている¹。1871年の「パリ・コミューン」の際にコロヌがパリ・コミューン参加者によって倒壊させられたが、ユゴーはこれを激しく非難した²。

・・・このような調子でヴィクトル・ユゴーの生育史と現実対応に見られる思想傾向との相関を綴っていくと面白いことは面白いのだが、紙幅がどれだけあっても足りない。ごくかいつまんで紹介しておく。「この世紀の初めのほとんどすべての人のように、非論理的で正直、正統王朝派でヴォルテール主義、自由なキリスト教徒、自由なボナパルティスト、王制下で手探りの社会主義者であった³」。

私の従前の狭量な教養、刷り込まれた観念におけるヴィクトル・ユゴー像は社会派、民衆派、すなわち「弱きを助ける」勇敢な詩人・文人であった。50歳を過ぎて執筆された超大作『レ・ミゼラブル』の抄本や私の読書環境から得た印象でしかない、というべきか。だが「弱きを助ける」は、『レ・ミゼラブル』の底流にほのかに感じさせてくれる、私の狭量な教養の主観で捉えるところの「社会主義」(果たしてどうか?)ばかりではない。ヨーロッパに伝統的な「慈善」(博愛主義)のエキスがたつぷりと詰まっている。宗教的慈善、篤志家による慈善と「慈善」には多様な形があるが、『レ・ミゼラブル』に描かれている「慈善」行動にはそのバック・グラウンドにキリスト教的な「贖罪」意識があるし、その行動の担い手すなわちジャン・バルジャンは「気は優しく力持ち、ついでに底の知れない大金持ち」(篤志家)である。私には、ジャン・バルジャンがやがてコゼットの夫になるマリウスを背負って地下水道を歩く姿を、十字架を背負って歩くイエス・キリストに映して見えたのである(事実、そのような文学研究があるそうだ)。ユゴー自身も大いなる「慈善」家であったし、確かに気の優しい人物であった。

ヴィクトル・ユゴーの人物像を概して言うなれば、熱狂的な愛国主義者であり、その愛

¹ なお、1830年7月の革命が終わり立憲王政が開始された同年8月に、ユゴーは言う、「この世紀には、一人の偉大な人物と一つの偉大なことしかなかった、つまりナポレオンと自由とだ。偉大な人物がいなければ、偉大なことはなかった。」と(「日記」より)。

² 「パリ・コミューン」は議会決定をし、コロヌを「野蛮の記念建築物、暴力と偽りの栄光の象徴、軍国主義の肯定、国際的な権利の否定」とし、1871年5月16日に倒壊した。この理由づけこそ、ユゴーをして、「パリ・コミューン」は「無学」「無識」の徒党集団の証しと言わしめたのである。

³ Alfred BARBOU, Victor HUGO et son temps, EUGENE HUGURS, ÉDITEUR, Paris. 1881. p.220. ここでいう「社会主義」とはサン＝シモン主義、フーリエ主義などの「初期社会主義」のこと。なお本稿執筆にあたっては、同書の他、Victor HUGO, Écris politiques, LE LIVRE DE POCHE, Paris. 2001. Victor HUGO, Choses vues – souvenirs, journaux, cahiers 1830-1885, par Hubert JUIN, Gallimard, 1972、辻昶・丸岡高弘『ヴィクトル＝ユゴー』(人と思想 68) 清水書院、東京、1981年、などを参考にした。

国はフランスの歴史と伝統の上に立つ文明主義者となって表れる。そして、日常生活や日常の政治に関しては、ヒューマニストで自由主義者であった、ということになるのだろう。しかし、貧民が少なくなき餓死をした 1870—1971 年の普仏戦争の間、食糧難で「民衆はネズミさえ食べる」という風評が出たおりに、好奇心で「ネズミ」を食べ、さらに動物園のゾウも食べたという趣味主義的な生活を一方で続けていたことは、指摘しておかなければならない。

3.

だが、同時に指摘しておかなければならないのは、ユゴーには、政治形態に対するある理念が内在していたことである。すなわち、このことは彼のフランスを中心としたヨーロッパ統合の政治的世界観のコアともみなすことができるのである。

次は、1832 年頃の日記の一節である⁴。

我々には共和政の問題も君主政の言葉も必要である。

王はその日、民衆ら(les peuples)は翌日。

いくらかの人々から聞こえるような共和政は、一文無しで、理念もなく、徳もない人々による、現実のこの三種類を牛耳る人なら誰でもよい、そうした人たちに対する戦争である。

共和政は、私によれば、共和政はまだ熟していない。しかし 100 年内にヨーロッパを覆うだろう、それは社会の中の最高の社会である。国民衛兵が守り、陪審員が裁判する。コミューンが行政管理をする。選挙区民が統治する。

君主政の四つの要素、すなわち軍隊、司法官、行政、貴族院議員は、こうした共和政にとって、力を失いやがて死ぬやっかいな四つのこぶでしかない。

非常に優れた選挙法、民衆(le peuple)が満足に読むようになったとき：

第 1 条 すべてのフランス人は選挙民である。

第 2 条 すべてのフランス人は被選挙権がある。

聖職者がそれに気が付かず、態度を変えないならば、やがてフランスで三色旗とは違う別の三位一体が信じられるようになるだろう。

⁴ Alfred BARBOU, Victor HUGO et son temps, EUGENE HUGURS, ÉDITEUR, Paris. 1881. p.221.より引用。

革命は文明化の幼虫である。

「力を失いやがて死ぬやっかいな・・・こぶ」と揶揄している貴族院議員の地位を、後年ユゴー自身が手に入れることに心を入れ、実現させたことは、歴史の皮肉というしかない。いや、ユゴーの中に、本質的に内在していた理念と行動との二律背反の典型であることの象徴であるというべきなのかもしれない。ただ、行動が現実の政治情勢の中で揺れ動き質を変えていったのに反して、ここに見られる「共和政」理念は、ユゴーの中で、以降、終生保ち続けられたと見ることができる。日記に戻って少し詳しく見よう。

ユゴーは、二つの「共和政」を描いている。

一つは現実に「共和政」の名の下で、「一文無しで、理念もなく、徳もない人々」によって唱えられている運動。その運動は、財政、思想・哲学、モラルをすべて掌握している立場に対して、「戦争」を仕掛けている、そして、その結末は「フランスで三色旗とは違う別の三位一体が信じられるようになるだろう」と言う。三色旗は「自由・平等・友愛」の象徴であると言われるが、もう一つ「王侯・貴族・市民」を象徴するものでもあると言われる。綿密なる検証をしなければならないが、ユゴーはおそらく、「自由・平等・友愛」も「王侯・貴族・市民」もフランス三色旗の象徴であるとし、1830年の革命はもとより、1848年革命、そして1871年の革命（パリ・コミューン）の戦争の根底にある「一文無しで、理念もなく、徳もない人々」による「別の三位一体」の政治理念に基づく政体（社会主義政体）の出現を認めてはいなかった。『レ・ミゼラブル』からこのことを見てみよう。

ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』は、その時代背景として、ナポレオンの帝政の崩壊過程から描き出されている。各所にはユゴーが丹念に調べ上げた歴史事象などが挿入されており、朱線を引き引き読まざるを得ないテキストのような、ある種の「煩わしさ」と「開明の喜び」との思いを持ちながら読む。

1832年の学生を主体としたささやかな蜂起事件を描いた場面、バリケードの戦いの場面で、ユゴーは少年ガヴロッシュに次のような歌を歌わせた⁵。

ナンテールに住むヤツあ、さもしいヤツよ、
そりゃ、ヴォルテールのせいさ、

⁵ Gavroche。『レ・ミゼラブル』のためにヴィクトル・ユゴーが登場させた少年の名前。フランス語辞書には1866年から一般名詞、形容詞として採用されている。「パリの下町っ子、反抗的であざける」とフランスの代表的な辞典・ロベールに説明されている。我が国では「すばしっこい少年」が辞義として載せられている（『クラウン仏和辞典』）。

パレゾーに住むヤツあ、ケダモノよ、
そりゃ、ルソーのせいだ。

国民衛兵隊の鉛玉が飛ぶ中をガヴロッシュは続けて歌う。

おれは公証人ではないよ、
そりゃ、ヴォルテールのせいさ、
おれはなけなし風来坊、
そりゃ、ルソーのせいだ。

さらに歌い続けるが、ついに鉛玉が命中し歌は中断される。ナンテールもパレゾーもパリ市内の安寧秩序のために設けられた郊外の「掃き溜め」地である。大革命が掲げた「自由」(ヴォルテール)も「平等」(ルソー)も、ガヴロッシュたちにとっては無縁のもの。ただの身の卑しい者でしかない。そして公証人のように名誉や地位のある人たちはガヴロッシュたちを、さもしいヤツ、ケダモノ同然、と呼ぶ。いや、そうさせた源こそヴォルテールでありルソーであると歌うのである。「自由」と「平等」はフランスの公共のイデオロギーとして定着していた。「貧民」「浮浪民」にとっては、「自由」も「平等」も蚊帳の外。ユゴーは言う、「主義にも、自由、平等、友愛、普通選挙にも、万人による万人の政治にさえ反対して、苦悩と、失望と、貧窮と、熱狂と、貧困と、毒気と、無知と、暗黒との底から、大変な絶望者である貧民が抗議の声をあげ、浮浪民が民衆に戦いをいどむ⁶」。

ユゴーは、ガヴロッシュに身なりを変えてヴォルテールを、そしてルソーを否定したのであるか？そうではない。彼は民衆の哲学である自由と平等とを尊べばこそ、ガヴロッシュを登場させたのだ。「貧民」「浮浪民」による民衆に対するある種のクーデターとしてこの歌を歌わせ、ユゴーはそのクーデターに戦いを挑んだ。ガヴロッシュが鉛の玉に死ぬことに象徴されているように、「貧民」「浮浪民」による「民衆」に対するクーデターは認められないのである。

こうして見ると、「共和政」主張の日記に見られる「民衆」と『レ・ミゼラブル』に見られる「民衆」との間にユゴーの認識の変化が表れていることに気付かされるのである。日記の方の「民衆」は「一文無しで、理念もなく、徳もない人々」として描かれているのに対し、『レ・ミゼラブル』ではそれに相当するのが「貧民」「浮浪民」である。かつての(日

⁶ *Les Misérable II*, Gallimard, p 541. 第5部ジャン・バルジャンの導入部分である。「民衆に戦いをいどむ」とある「民衆」とは、国民衛兵隊に象徴されている。

記の「民衆」は、義務教育制度(1833年)によって普通教育の恩恵の拡大が次第になされ、近代知を得る機会をふくらませた。財を得る機会を得、知と徳を得る機会を得た。さらには、自らの意志を国政に届ける機会を得た(1848年普通選挙制度)。その機会を利することができた「民衆」はもはやユゴーが日記で言う「民衆」ではない。しかしその一方で、義務教育を受ける機を得ず、従って財も、知も徳も得られない新しい(ユゴーにとってのことだが)社会階層、すなわち「貧民」「浮浪民」が数多く誕生した—あくまでも近代的システムのもとでの話である—。彼らは選挙制度による改革に参画する「民衆」に対しクーデターを起こす。1830年代から1850年前後にかけてのフランス社会の資本主義化の変動の様が如実に表現に表れている。それとともに、ユゴーが、基本的には大衆(およびその持つ革命的エネルギー)を怖れていたことをも如実に示すものである。このことをユゴーに即して明確に見られるのは、1848年6月革命に際しての彼の態度である。

1848年2月の革命で王政が倒れ、第2共和政に向けてフランス社会は出発したものの、台頭しつつあった労働者の要求を排除しようとする教会派、保守派、共和右派の政策が進められ、労働者の怒りのエネルギーは高まっていく。それが最高潮に達し爆発したのが同年6月である。「6月事件」「6月暴動」「6月革命」などと呼ばれたこの労働者を中心とした大闘争において、ユゴーは次のようにふるまっていた。王党派の推薦によって立憲議会議員の補欠選挙で当選したばかりのユゴーは、労働者集団の前で「諸君、降伏したまえ」と演説し、労働者などの群衆から罵声を浴びせられ、そのまま退散した。

なお、この「6月革命」に参加し逮捕され追放刑などに処せられた人々の中に、セガンが所属する政治グループの仲間達バルベス、ソブリエ等数多くいたことは付記するに値するだろう。

いずれにしても、ユゴーに言わせれば、「貧民」や「浮浪民」は近代文明(ヨーロッパの中心的文明としてのフランス文明)の僥倖に浴することができない「かわいそうな人々」であり、ユゴーが後年、「貧民」や「浮浪民」の子どもたちのための慈善事業を興すベースプランが『レ・ミゼラブル』のコゼットの半生に描かれているわけである。

4.

ユゴーが日記で述べた「共和政」のあと一つは「まだ成熟していない共和政」である。現実の君主政のような中央集権体制ではなく、コミューン(*la commune*)による自治的連合国家体制である。コミューンについては別稿を用意しなければならないフランス近代にお

ける政治概念であるが、近似的な政治形態としてはスイスのカントン連邦制、アメリカの州の連邦制がある。コミューンという概念そのものは中世の自由都市に遡ることができるが、近代に限定していえば、18世紀末期に、宗教的共同体であったパロワス(paroisse)の行政・経済部面をコミューンとして自立させた。しかしながら、フランス革命によって目指された近代国家は基本的には中央集権国家であり、コミューンに対する自治権付与はほとんどなかった。ユゴーはそれを自治的共同体として自立させ、自立した自治的共同体の連合として国家を描いたわけである。軍事、司法、行政の三権をコミューンが掌握し、国家管理は代議制に基づく国民の直接管理を導入する。軍事は「国民衛兵」すなわち自警民兵、司法は「陪審員」、行政は、明記されていないけれども、住民による選挙によって選ばれた行政官（「議員」による管理、が考えられている。これらは古代ギリシャのポリス（都市国家）と極めて似ているが、ユゴーが当面言われている「共和政」を否定し、「未成熟な共和政」を思念したのは古代ギリシャをモデルとしていたのだろうか。もっとも古代ギリシャのポリスの担い手は奴隷や外国人を排斥しなおかつ一握りの「市民」と呼ばれる階層でしかなかったが、ユゴーが思念したコミューナル（コミューンの主権者）は「すべての民衆」であった。ただし「現実の民衆」は「満足に読む」ことができないのが多数派である。自立的個人であるためには「満足に読む」こと、すなわち教養（近代知）が前提条件となる。

刮目すべきことは、これらは、1871年の「パリ・コミューン」の政治システム思想と共通している、ということである。いな、ユゴーが終生持ち続けた共和政理念の実際の「形」が前記の日記にくっきりと描かれている、そして「パリ・コミューン」はその相似形だと言わなければならない。

対比的に、「パリ・コミューン」議会の最長老ブスレイのフリーメーソンにおける演説とユゴーの『ラペル』紙編集者に宛てた手紙とを以下に紹介しておこう。奇しくも、両者は1871年4月28日の日付を持っている。

まず、ブスレイの演説から。

パリにそしてフランスにコミューンが作られたことを、ここにご出席の皆さん方が証明してください。パリ・コミューンの解放、それは、疑いもなく、共和国のすべてのコミューンの解放であります。（中略）

共和国は、もはや今日、私たちの偉大な革命の日々のそれではしかありません。93年の

共和国⁷は、闘いのために、外も内も、その手中に収めて、全祖国の力を中央集権化することを必要とする戦士でした。1871年の共和国は平和を受胎させるための自由をとりわけ必要とする労働者です。(中略)

繰り返して申しますが、それ故、コミューンの解放は共和国自身の解放なのです。どの社会集団も完全な独立と活動の完全な自由とを取り戻すようになります。

コミューンは地方的であることに専念します。

県は地域的であることに専念します。

政府は国家的であることに専念します。

そして、高らかに言います、私たちが打ち立てたコミューンは模範的なコミューンとなるでしょう。

続いてユゴーの手紙から。

なるほどパリの権利は明白です。パリは一つのコミューンなのです。あらゆるコミューンの中でもっとも必然であり、当然もっとも名高いコミューンです。パリ・コミューン⁸はフランス共和国の結果なのです。(中略)パリは、フランスが共和政の権利であるように、コミューンの権利なのです。共和国の本当の定義、それがこれ、つまり私は私の主権者である、ということです。それは投票によるものではないということです⁹。それは当然の権利なのです。(中略)

国家的な自我はこの形式、すなわち共和政を選び、地方的な自我はこの形式、すなわちコミューンを選び、個人の自我はこの形式、すなわち自由を選びます。

私の自我は完全ではありませんし、私は次の三つの状況における市民でしかありませ

⁷ 1793年の「パリ・コミューン」のこと。

⁸ ユゴーはこの箇所においてのみ、**Paris commune**と表記している。フランス語ではきわめて例外的なこの表記が日米の共通表記法となっていることは興味深いものである。

⁹ 1870年10月にパリ市庁舎を取り囲んだ市民の間から、コミューン議会選挙を実施せよという強い要求が出された。それに対して国家防衛政府は「今はまだコミューン議会選挙を実施するのは早い」と答える。両者は厳しく対立したが、政府側が妥協案として「現政府信任可否を国民投票によって確かめる」「それと同時に、パリ全20区の区長・助役の公選制を導入する」と提案。コミューン主張派がそれを受け入れた。国民投票は圧倒的に現政府のやり方を支持するという結果が出された。パリは革新的であっても大票田の農村はきわめて保守的であり反パリであったから、最初から結果が分かっていた国民投票である。では区長・助役選はどうであったかという、意外にもコミューン反対派が多数を占めた。ユゴーも区長選に立候補(担がれた?)したが落選の憂き目に遭う。ユゴーは大衆の人気は絶大であったといわれるが、その大衆とは、パリ市内のそれではなく、パリ郊外の大衆であったことを示す一つの逸話である。パリ市内の大衆とは、伝統的な技術職人・親方が主であり、近代労働者はまだ少なかった、ということである。以上は、ユゴーがコミューンは当然の権利(自然権)であって投票で決すべきではない、と述べた一つのバック・グラウンドである。

ん。私の人格における自由、私の居住におけるコミューン、私の祖国における共和政。

明白ではありませんか？

コミューンを言明したパリの権利は議論の余地がありません。

ブスレイとユゴーとの間にはかなりの共通性があることを認めることができるだろう。すなわち、コミューンとは共和政体を成立させ、組織する自治権を持った地域共同体のことである。両者の間に違いがあるのは、その主権者認識である。ブスレイは明確に「労働者」を主権者としているのに対して、ユゴーは「私」すなわち「人格的個人」を主権者としていることである。このあたりは「近代」論の二つの道の可能性、すなわちやがて来る社会主義と個人主義とをそれぞれが示唆しているという点で、たいそう興味深いものであるが、このことに関してはこれ以上触れないこととする¹⁰。

5.

現実のユゴーはその時々政権の動きを見ながら自らが権力の中核に入っていく姿勢を示し、教養もなく非定住で言動が粗野な「下層民」に恐怖感を持っていた。しかしながら彼の哲学のうちではかなり早い時期から完全な共和政体を思念し、すべての諸個人が教養に裏づけられた人格的に自由な存在であることを是認していた。ユゴーが思念していた哲学は、時として、文学や政治演説（議会演説）などで語られる。「下層民」が教養ある人格的自由な存在に変革できる可能性を認めていたからである。その端的な哲学を挙げるとするならば、1. 児童実態の問題、2. 教育の問題、3. 宗教と政治との関係の問題である。これらはすべて不可分な問題としてユゴーには位置付けていた。すなわち、「下層民」が自

¹⁰ じつは、ユゴーは、パリがコミューンであることは当然のことだとしながらも、1871年の「パリ・コミューン」を是認していたのではないことを書き添えておきたい。本稿で使用した1871年4月28日付の書簡において、彼は、次のように言う。

3月18日以来、パリは、よくないことには、無名の人たちによって、しかも、さらに悪いことには、無学の人たちによってリードされています。どちらかと言えば先導者でなくついていく幾人かのリーダーを除いて、コミューンは無識です。

ユゴーは、フランスは精神でパリは頭脳だとする。ところが、「パリ・コミューン」では、フランス国民議会（「王政主義の多数派」）はフランス（精神）を知らず、パリのコミューン議会はパリ（頭脳）を知らない、従って「パリ・コミューン」の革命（戦争）は両者に非がある、という。

1871年3月26日にパリで男子普通選挙が実施された。世に言うコミューン選挙である。この時にユゴーも立候補しているが落選した（ユゴー自身は立候補していないのが事実であるようだ）。それはともかく、選出された議員は、ユゴーに言わせれば、ごく一部を除いて無名であり無学である、と言う。とうてい「頭脳」パリをリードできる能力などはない、それを典型的に象徴するのがコロヌの破壊である、としているわけである。

立した個人になるための基本構造なのである。現実的に恐怖を感じさせられる「下層民」に対して、ユゴーは、誰でも「下層民」から離脱する権利を持つ、その政治システム、福祉のあり方などを模索していた。「悲惨な状態」から離脱する手がかりを描いたのが『レ・ミゼラブル』である。ジャン・バルジャンが流れ着いたとある貧村に産業を興し一躍豊かな街に変えた挿話は近代産業化へのユゴーの展望であろうし（このあたりに、産業社会論を主張したサン＝シモニズムの影響が見られるように思われる）、教養なき粗野な人々はその教養を持とうとしなければ、職人社会から近代工業・産業社会に転換していく過渡期において、「転落」も早いことはコゼットの養い親に描かれている。宗教と政治の問題については先に紹介した「日記」の中に、宗教者の傲慢さを描いていることで分かるだろう。

ただ、ユゴーは、革命という方法による急激な社会変革は望まなかった。その代わり、教育に対して、強く期待していた。教育が人材を創る、その人材が社会を変革していく、という立場であった。このことが端的に示されているのが、1850年1月15日第二共和政下の立憲議会における演説である。この演説は「教育の自由」と題されているが、当時、第二共和政政府は教育の拡大を宗教者・宗教団体に依存しようとし、それまでの教育法体系に宗教者の権限を大きく付与することを求めた。宗教者・宗教団体が思うままの教育内容と方法とでなし得る学校設立を可能にしたり、宗教者・宗教団体が教員の人事権（採用・罷免権）に大きく関与したりすることができるような法案「教育の自由」法案を議会に提案していた。ユゴーはその反対演説として「教育の自由」を論じたのである。その自由とは「宗教者からの自由」である。宗教者が定める「神の摂理」に従うのではなく、自然権として諸個人が持つ教育権に従うべきである、というのがその趣旨である。注目すべきは、この演説で「義務教育」を「子どもの権利」として定義したこと、「あらゆる教育は無償であるべきだ」としたこと、すべてのコミューンに初等教育学校、各郡に中等教育学校、各県に高等教育学校、その他国家的な基盤に立つアカデミーなどを整備することによって、人材を村から、町から、県から、そして国家的に育て発掘することができる、としたことである。もちろん、宗教と教育とは分離される。これは、近代教育制度の典型的な姿である。宗教と教育とが分離される、という点では、今日のフランス共和国、そして我が日本に引き継がれていることに注目する必要があるだろう。端的に言って、ユゴーの教育論は、我が国の（新旧）教育基本法に通じるものである。

ユゴーの渾身の力を振り絞った演説にもかかわらず、政府提出の「教育の自由」法は議会で可決され、フランス近代史の中でもっとも悪名の高い教育不毛の時代がしばらく続く

ことになる。どのように教育不毛であったのか。たった一つの事例でもってすべてを説明することは危険であることを承知の上で、次のような事例を示しておく¹¹。

オーブ県モンポティエ・コミューンの教師ガルニエは、1860年12月20日付の日記に、「…教師はワイン用のぶどうの収穫の時に日に3回鐘を鳴らす義務を負った」し、「…パロアスの聖職者として」それはまったく無報酬だった、と明確に述べている。ただし、毎日、お告げの鐘を鳴らす義務を負い、「6フランと見積もられる墓地草が彼に与えられた」。

これが公教育教師の実態である。こうしたことが克服される、すなわち宗教と教育とが分離されたのは、1880年初頭のこと¹²。ユゴーは1885年にこの世を去っているから、まるで彼の「教育の自由」提案の実現を見届けた上での死であったかのようなのである。

ユゴーの遺言（1883年8月2日）：

私は貧しい人々に5万フランを与えます。

私は霊柩車で墓場に運ばれることを望みます。

私はあらゆる教会の祈禱を拒みます、私はあらゆる人の祈りを求めます。

私は神を信じます。

ヴィクトル・ユゴー

おわりに—セガンとユゴーとは現実に結びあえる論理はない

1848年から1850年までについて、セガンと結びあった関係にあったといわれたヴィクトル・ユゴーを点検した。

文学運動、社会運動、政治運動と彼の場合には分けられるが、復古王政時代までがロマン主義文学で一世を風靡し、立憲君主時代が社会の矛盾に目を向けたリベラリストとして発言が目立ち、立憲君主末期から第2共和政時代に政治家として政治運動に関わる（立憲君主政時代は貴族院議員、第2共和政時代は立憲議会議員）。セガンが「政治的にユゴーと関わった」とするならば、思想・論理的には第2共和政時代ということ、すなわち1848年以

¹¹ Jean-Marc Lefebvre, *La Commune et la réforme de l'enseignement, ou le droit à la liberté des s'instruire!* "La Commune" n.21 2004. 所収。

¹² 当然のことながら、宗教と教育とが分離するためには宗教と政治とが分離することが前提となる。1880年以前では、パリ・コミューンがこの課題を真正面に掲げ、議会で「国家と教会とは分離される」という政令の決定をした。このことに関してユゴーは明言していないけれども、彼は敬虔な信仰を持っていたが、司教や修道士は信用していなかった。ローマは認めたが教会は認めなかった、とも言えるだろう。

降ということになる。しかしながら、ユゴーの政治的立場は、立憲君主末期には共和政の立場ではなく王政の立場をとり、民衆から輿蹙を買っている。「2月革命」のあと、王党派の推薦によって立憲議会議員に立候補・当選（補欠選挙：この時の当選者は11名。ブルードン、『パリの秘密』など、ユゴーと同じく民衆派作家として知られるウージェーヌ・シューらが含まれる）、48年の労働者が蜂起した「6月事件」では、前述のように、労働者に向かって降伏せよと勧告している。従って、ここまでは、ユゴーが労働者を中心とした民衆に支持される政治運動には関わっていない。8月には政治新聞『エヴァヌマン』を創刊し、最初はラマルティエヌ（穏健共和派）支持、10月頃からレイ・ナポレオンを支持、1850年は議会活動が主であり、大統領であるナポレオンを支えた。1851年からはナポレオン批判を強め、12月のナポレオンのクーデターに際しては抵抗委員会を組織し、武装蜂起を呼びかけたが、失敗。すぐ、ブリュッセルに亡命。その後、10数年間はガーンジ島を主たる居住地としながら国外生活を送っている。

こうして見てみると、セガンがユゴーと政治的に関わったとするならば、セガンもまた王党派、穏健民主政派、ナポレオン（超党派民衆支持）派＝ポピュリズムという風に変わっていったと見るのが自然であろう。ユゴーはブルジョア自由主義者として、個の自由が保障されるなら政治形態はどのようなものでもいい、というのが彼の1850年までの姿ではないか。

果たしてセガンはどうだったのだろうか。

なお、下記の拙著を参考にいただければ幸いです。

1. ^{イディオ}知的障害教育の開拓者セガン～孤立から社会化への探究 新日本出版社 第2章
2. 19世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミューン 幻戯書房 第2部